



あーとバス 記録集 2008-2019

小中学生との鑑賞プログラム

☆ 空と糸        
 されりや    かべの見方 
 白い部屋  黄色いへや
 ま、白!          
 変身                 
 ヘッドホン                 
 黄色がベ、さんかくのスタンプ
 系 ☆ 白い系、青の系
 黒いもよう、スプーン、とうめいの もじ

石も運んでいた 黄色で テレビ"が 3台 あるへや。
 ぎいらいへや 上から糸がたれているへや。
 カフェ 糸のへ屋 くらくこなそのえいぞうがながれいている
 へや。
 くらいつや 黄色のへ屋 ラーメンみたいなもの
 系 くらりへ屋

電気、スプーン、イス、ブラン(音) 
 ヘットファン、えいぞう、暗いへや  

あーとバス 記録集 2008-2019 小中学生との鑑賞プログラム



はじめに

水戸芸術館現代美術センターでは公教育と連携した教育プログラムとして、水戸市内の小中学生を対象とした展覧会鑑賞ツアー「あーとバス」を2008年から行っています。開始から2019年度までの12年間に、のべ1万人の児童、生徒のみなさんにご参加いただきました。この度、その記録集を刊行いたします。

参加した子どもたちはギャラリーの中で少人数のグループに分かれ、市民が担うガイドスタッフと言葉を交わし、表現活動を行ってきました。記録集の前半は、グループでの鑑賞やワークショップの様子を紹介しています。このプログラムが意識的に提供しているのは、一つの答えに向かったの学習ではなく、一人ひとりの感性や言葉が肯定される美術館ならではの対話空間です。その経験は、作品世界を知ること以上に、その後の子どもたちに大きな影響を与えうと考えます。

また、この記録集の後半は、ガイドスタッフの活動が記録されています。初年度、筑波大学の学生19人からスタートしたガイドスタッフは、次第に他の大学の学生や、館内係員、一般市民が加わり、今や40人以上の大人たちによって支えられています。研修は方法論を「習う」のではなく、多様な職業や年齢の人たちが等しい立場で方法論を「探す」集合知のスタイルをとっています。ガイドスタッフが子どもたちに向ける問いかけやオープンマインドは、大人たちの葛藤と信頼をもとに獲得されます。

その他、この記録集には、プログラムに関わるさまざまな立場の方たちの声も収録しました。「あーとバス」が目指してきたことを多くのみなさまと共有し、さらなる利用の一助となることを願います。

最後になりましたが、創造的な場を長年かけてつくってくださった筑波大学の林剛人丸さんをはじめ、「あーとバス」に関わってくださったすべてのみなさまに、改めて感謝申し上げます。

2020年3月
水戸芸術館現代美術センター
教育プログラムコーディネーター 森山純子

「あーとバス」スケジュール

4-5月頃	団体募集
6-7月頃	団体締切
7-10月頃	ガイドスタッフ募集
11-12月頃	ガイドスタッフ説明会、研修、リハーサル
12月頃	団体来館

もくじ

- 3 はじめに
- 4 スケジュール／もくじ

子どもたちとの鑑賞

- 8 2019年度の参加団体
- 9 来館したら
- 10 2019年度活動のようす
- 20 「あーとバス」ギャラリーマップ
- 21 子ども、ガイドスタッフのことば
- 22 先生のことば
- 24 2008-2018年度の参加団体
- 26 2008-2018年度活動のようす
- 34 「ワークショップについて」林剛人丸
- 38 参加するには？
- 41 「美術館という『非日常』がもたらすもの」春田友則

ガイドスタッフの活動

- 44 ガイドスタッフとは？
- 46 活動レポート
- 48 2019年度の研修
- 50 インタビュー
- 52 2019年度ガイドスタッフ
- 54 ガイドスタッフの感想

テキスト

- 56 「バスは走りつづける」佐藤麻衣子
- 58 「『美しい』のわからなさを、語るために。」石田喜美
- 60 「12年の活動スケッチ」林剛人丸

子どもたちとの
鑑賞

2019年度の参加団体

12月4日(水)	水戸市立双葉台小学校4年	10:30-11:40	105人
	茨城朝鮮初中高級学校初級部1-6年	13:30-15:00	25人
12月5日(木)	水戸市立浜田小学校4年	10:15-11:45	86人
12月6日(金)	水戸市立柳河小学校4-6年	13:30-14:30	43人
	茨城朝鮮初中高級学校中級部1-3年	16:00-17:30	16人
12月7日(土)	水戸市立緑岡中学校造形部	9:30-10:30	14人
	城里町立常北中学校文芸部	9:30-11:00	10人
	吉田学童クラブ	13:30-15:00	37人
12月13日(金)	水戸市立見川小学校6年	14:00-15:00	74人
	水戸市立赤塚中学校創作部	16:40-18:00	15人
12月14日(土)	「あーとバス」番外編*	14:00-15:30	10人

*小学生以上であれば誰でも参加できる個人参加編

9団体+個人 435人参加

鑑賞した展覧会 | 展示と対話のプログラム

『アートセンターをひらく 第II期』

2019年10月26日(土)-2020年1月26日(日)



来館したら



到着



あいさつ



グループごとに
出発

- ・自己紹介
- ・ギャラリーのマナー、プログラムの紹介



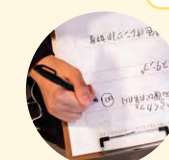
ギャラリーツアー

対話をしながら作品鑑賞
発見を共有したり、お互いの
のちがいに気づいたり



ワークショップ

ギャラリーで感じた
こと、考えたことの
表現にトライ



帰路へ

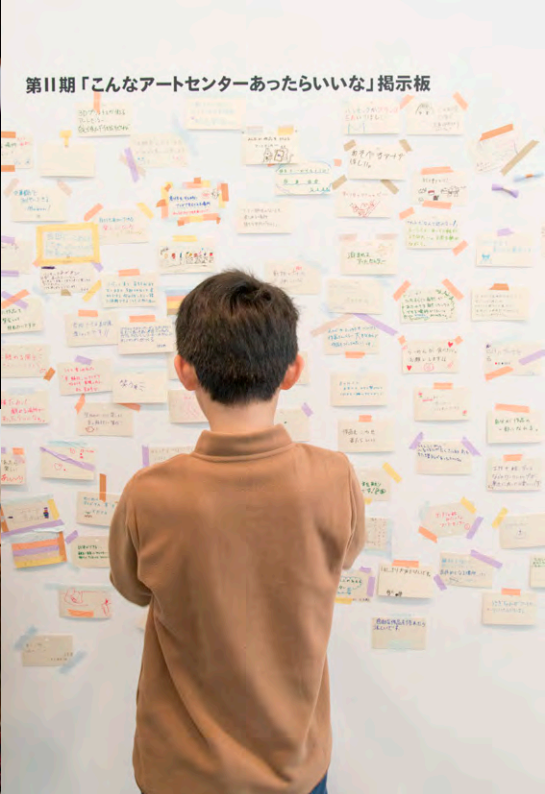




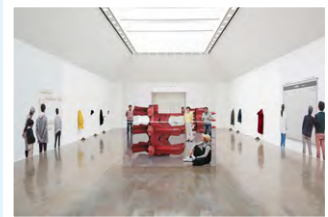




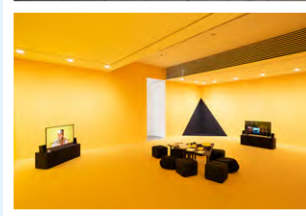




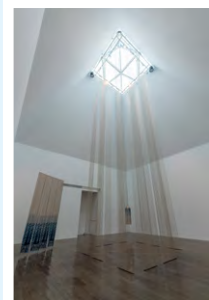
「あーとバス」ギャラリーマップ



エマニュエル・レネ《なぜ、キャベツくんが?》



ハロルド・オフェイ《村のよそ者》



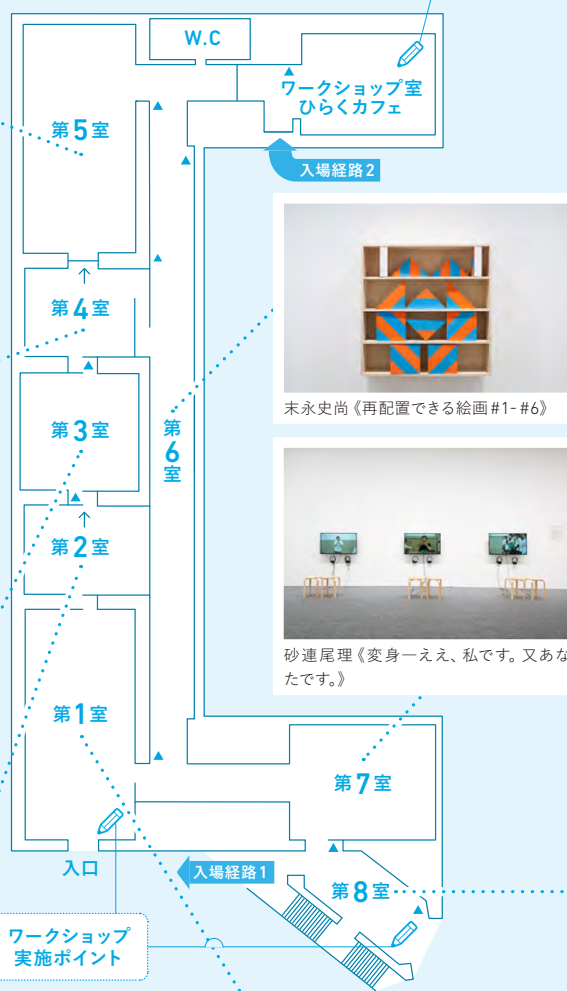
呉夏枝《彼女の部屋にとどけられたもの》



潘逸舟《わたしは家を選び、家はわたしを移す》

▲…末永史尚作品

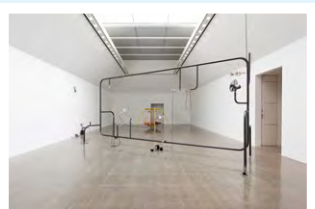
ワークショップ
実施ポイント



末永史尚《再配置できる絵画#1-#6》



砂連尾理《変身—ええ、私です。又あなたです。》



毛利悠子《無題 (パイプ)》

子ども、ガイドスタッフのこぼれ

*子=子ども、ガ=ガイドスタッフ

第1室

子：触らないで、って言ったのは、
実は楽器だからでしょ？

子：あれは何？

(指さす先に監視員のイスとひざかけ
があった。部屋全体が作品となると、
そのイスとひざかけは作品の一部!?)

第3室

子：この糸は人の思い、人の気持ち。
だから、切れなくてずっと長い。
いろんな人の気持ちが、いっぱい
いっぱい長くあるの

子：自分たちが天井の光の傘の下に
いて、光の雨に濡れないでいる

第5室

子：土が服を育てているのかなあ

子：あのお、すみません。写真から
抜け出したんですか？(ガイド
スタッフに写真のモデルがいたため)

第7室

ガ：みんなで輪になって
手をつないで“変身”
した

第8室

ガ：「いろいろあって楽しかった」と
書いてくれた

(口数は少ないもののその子なりに楽し
んでくれていたことが嬉しかった)

第2室

ガ：「何でこんなことしている
のかなー？」と聞いたら、
「知ってるでしょ」と言
われた

子：人生を表しているんじゃ
ないかな

第4室

ガ：作家のポーズを小学生
と一緒に真似した

子：(クッションを)気に入っ
た、持ち帰りたい

第6室

ガ：一人の男の子が並べ終
わったあと、「かえるの
顔ができた!」と、みん
なが「わーっ」となって
盛り上がった



「こんなアートセンターあったらいいな」
掲示板

先生のことば

親しみやすい雰囲気であげてくれ、優しく声をかけてくれたので、安心して自分の意見や感想を言っていた

みんなでバスに乗るわくわく感からの、ガイドさんと出会うドキドキ感からの、作品の世界観に入る感動…「あーとバス」でみられる生徒の表情は最高です！写真を撮らずにはいられません

「美術館ってしゃべりながら作品を見ていいんだ」「作品に対する感想って、自分の意見をそのまま話していいんだ」「自分の気持ちを言葉にするってやっぱり難しいけど、みんなで話せて楽しかった」という感想が聞けた

教員も生徒も一緒に感動体験できる。大人もとても楽しい

「僕、今日とても楽しいです、水戸芸術館すごく好きです」と何回も言っている生徒がいて、帰りもなごりおしそだった

ガイドさんがうまく生徒の言葉や気持ちを引き出して、やりとりをみていると自分も勉強になる

公的な大会などがなく部活動単位でバスに乗ることがなかった美術部員の活動が、他の生徒や先生方に見直されるようになった

(「あーとバス」に参加できていいなあ、という羨望や、えっ！美術部って美術鑑賞してるんだ、すげえ、という感があり、一気にステイタスが上がった感じがしました)

言葉で表現することは少し難しかったようですが、絵で表現すると、できている子どもたちがありました

映像資料が多かったので、やや難しかった気がします

授業時数の関係で、学年単位での鑑賞に行けなくなかった時「去年すごく楽しかったので行けないのが残念です。どうして今年は行けないんですか？」と生徒に言われ、力不足を感じて申し訳なく思った

美術の授業で真面目に取り組めなかった生徒が「あーとバスで見たあの作品のイメージで作りたい」と初めて意欲を見せてくれた。本物を見るってこういうことかと、生徒の変容に感動

楽しいので予定をやりくりするのも頑張れる

のんびりした気分になった

最初に参加した「あーとバス」で、美術館に不慣れな教員(私です)と生徒だったため、事前指導不足もあり、スタッフやガイドさんに失礼な態度をとってしまった生徒がいた。後日謝罪の気持ちを伝えたら「私たちは少しでも多くの人に作品を楽しんでほしいと思っています、どんな生徒さんでも受け入れていきたいです」と言っていたのでありがたかった

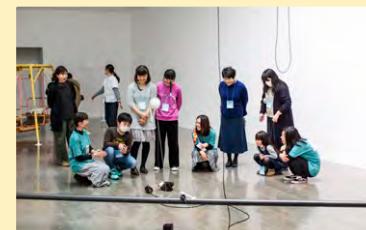
ガイドスタッフが自分の価値観を強く出されていたが、児童の考えを引き出すためにも、見るポイントをヒントとして出していただくのでもよかったかなと思いました

「あーとバス」番外編より

小学生以上であれば誰でも参加できる個人参加編、2019年度からスタート

小学生、高校生、
大人が参加

参加者：この展覧会を20回見ているが新しい発見があった
参加者：一人のときでは見えなかったものを、子どもたちと対話したからこそ見る事ができた



2008-2018年度の参加団体

2008	6団体 1,162人	2011	9団体 1,197人	2014	12団体 819人	2017	9団体 609人
10月26日(日) 水戸市立石川中学校美術部 15		9月27日(火) 水戸市立笠原中学校2年 79		9月24日(水) 水戸市立城東小学校5年 57		11月16日(木) 水戸市立吉沢小学校6年 86	
10月28日(火) 水戸市立見川中学校3年 230		水戸市立第三中学校美術部 22		水戸市立笠原中学校美術部 16		水戸市立城東小学校5年 37	
10月30日(木) 水戸市立見川小学校5年 107		9月28日(水) 水戸市立見川小学校6年 87		9月25日(木) 水戸市立寿小学校4年 103		11月17日(金) 茨城朝鮮初中高級学校	
10月31日(金) 水戸市立見川小学校6年 113		水戸市立妻里小学校6年 29		水戸市立大場小学校3-4年 22		初級部4-6年 10	
11月5日(水) 水戸市立五軒小学校4年 62		水戸市立上中妻小学校5年 50		9月26日(金) 水戸市立吉田小学校6年 122		水戸市立寿小学校3年 110	
水戸市立稲荷第一小学校6年 63		9月29日(木) 私立リリーベール小学校6年 68		水戸市立下大野小学校4-6年 59		11月20日(月) 水戸市立柳河小学校5-6年 34	
水戸市立常澄中学校1年 117		10月4日(火) 水戸市立見川中学校1-2年 511		10月1日(水) 水戸市立緑岡小学校6年 163		11月21日(火) 水戸市立見川小学校6年 81	
11月7日(金) 水戸市立見川中学校1-2年 455		10月5日(水) 水戸市立国田小中学校小6年、中2年 41		10月2日(木) 水戸市立内原小学校6年 49		水戸市立新荘小学校4-6年 104	
鑑賞した展覧会 日常の喜び		10月6日(木) 水戸市立稲荷第一小学校6年 70		水戸市立上中妻小学校6年 28		11月22日(水) 水戸市立石川小学校4年 97	
		10月7日(金) 水戸市立見川中学校3年 240		10月3日(金) 水戸市立寿小学校3年 102		茨城朝鮮初中高級学校	
		鑑賞した展覧会 CAFE in Mito 2011		水戸市立稲荷第一小学校6年 50		中級部1-3年 18	
		一かかわりの色いろ		水戸市立国田小中学校小6-中1年 30		11月24日(金) 水戸市立見川中学校美術部 32	
				鑑賞した展覧会 鈴木康広展 近所の地球		鑑賞した展覧会 デイヴィッド・シュリグリー	
						ルーズ・ユア・マインド	
						—ようこそダークなせかいへ—	
2009	5団体 996人	2012	5団体 330人	2015	9団体 783人	2018	11団体 792人
9月17日(木) 水戸市立見川中学校1-2年 467		9月20日(木) 水戸市立見川小学校6年 95		10月1日(木) 水戸市立石川小学校3年 103		11月27日(火) 水戸市立妻里小学校3-4年 70	
9月18日(金) 水戸市立見川中学校3年 246		9月21日(金) 水戸市立上大野小学校5年 20		水戸市立稲荷第一小学校6年 63		水戸市立寿小学校3年 118	
9月24日(木) 水戸市立稲荷第一小学校6年 49		水戸市立国田小中学校小6年、中2年 24		水戸市立上中妻小学校6年 52		11月28日(水) 水戸市立双葉台小学校4年 98	
9月25日(金) 水戸市立見川小学校6年 102		9月25日(火) 水戸市立稲荷第一小学校6年 57		10月2日(金) 水戸市立見川中学校3年 238		水戸市立緑岡中学校造形部 20	
10月1日(木) 水戸市立笠原中学校美術部 16		水戸市立吉田小学校6年 68		10月7日(水) 水戸市立大場小学校3-4年 27		12月5日(水) 水戸市立新荘小学校4-6年 108	
10月6日(火) 水戸市立常澄中学校1年 116		9月26日(水) 水戸市立吉田小学校6年 66		水戸市立城東小学校5年 47		12月6日(木) 水戸市立浜田小学校4年 80	
鑑賞した展覧会 現代美術も楽勝よ。		鑑賞した展覧会 水戸岡鋭治の鉄道デザイン展		10月8日(木) 水戸市立寿小学校3年 138		水戸市立見川中学校美術部 35	
		駅弁から新幹線まで		水戸市立吉沢小学校6年 82		12月7日(金) 水戸市立石川小学校4年 95	
				水戸市立新荘小学校4年 33		茨城朝鮮初中高級学校	
				鑑賞した展覧会 カフェ・イン・水戸 R		初級部1-6年 30	
						茨城朝鮮初中高級学校	
						中級部1-3年 14	
						12月11日(火) 水戸市立見川小学校6年 96	
						水戸市立柳河小学校4-5年 28	
						鑑賞した展覧会 霧の抵抗 中谷美二子	
2010	7団体 1,115人	2013	12団体 1,475人	2016	8団体 461人	2019	9団体+個人 435人
10月20日(水) 水戸市立見川中学校2-3年 467		10月1日(火) 水戸市立大場小学校3-6年 51		1月25日(水) 水戸市立上大野小学校5-6年 25			
10月21日(木) 水戸市立見川中学校1年 251		水戸市立見川中学校1年 241		水戸市立飯富小学校6年 32			
水戸市立国田小中学校小6年、中2年 42		10月2日(水) 水戸市立見川中学校2年 225		1月27日(金) 水戸市立見川小学校6年 84			
10月26日(火) 水戸市立鯉淵小学校6年 51		水戸市立石川中学校2年 93		水戸市立新荘小学校4年 36			
水戸市立新荘小学校5年 50		10月3日(木) 水戸市立三の丸小学校3年 91		2月1日(水) 水戸市立石川小学校5年 84			
10月28日(木) 水戸市立見川小学校6年 101		水戸市立下大野小学校4-6年 58		2月2日(木) 水戸市立城東小学校5年 52			
11月2日(火) 水戸市立寿小学校3年 106		10月4日(金) 水戸市立見川中学校3年 248		2月3日(金) 水戸市立寿小学校3年 120			
11月4日(木) 水戸市立稲荷第一小学校6年 47		水戸市立国田小中学校小6-中1年 34		水戸市立見川中学校美術部 28			
鑑賞した展覧会 石元泰博 写真展		10月8日(火) 水戸市立上大野小学校5-6年 23		鑑賞した展覧会 石川直樹 この星の光の地図を写す			
		10月9日(水) 水戸市立稲荷第一小学校6年 51					
		水戸市立上中妻小学校5年 30					
		10月10日(木) 水戸市立飯富小学校5-6年 58					
		水戸市立見川小学校6年 93					
		10月11日(金) 水戸市立緑岡小学校6年 179					
		鑑賞した展覧会 曾谷朝絵展 色色					



2008 | 2009



2010 | 2011





2012 | 2013



2014 | 2014





2015 | 2016



2017



2017 | 2017



2018 | 2018



「あーとバス」では鑑賞活動に加え、「表現」に着目したワークショップを行っています。「あーとバス」が始動した2008年と翌年の2009年には、考え込まず気軽に表現できるように、漫画のフキダシを模したボードを作成しました。『日常の喜び』(2008年)、『現代美術も楽勝よ。』(2009年)はどちらもグループ展。展示作品から一つを選んで〈キャッチコピーのようなものを書き込む〉ワークショップを鑑賞の最後に実施しました(fig.1-2)。書き込むのは自分が思ったことでもいいし、作品を擬人化した口語でもいい。思い出したことや連想したものでもいい。記号や絵を用いても、解読できなくてもよいこととしました。

間口をできる限り広げ、めいっぱい自由度を高めたつもりでも、想定外の質問や事態はやはりあるものです。一つの作品ではなく「ギャラリー全体に向けて書きたい」という小学生や、グループ全員で同じフレーズを書き込んだ中学生がいました。表現に注文や制限を設けると評価や比較には都合がよいものの、個人の自由な鑑賞活動を支援するプログラムの趣旨からすると、その必然性は乏しくなります。一方で「なんでもよい」など命題が漫然とすると取り掛かりにくくなってしまいます。そのような課題を抱えながら、2010年から2012年にかけては展覧会との関係性からワークショップのあり方を検討していきました。



fig.1 「日常=みえない芸術」

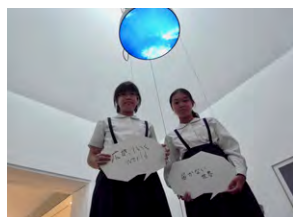


fig.2 「広がっていくworld」「届かない世界」

『石元泰博 写真展』(2010年)は、「あーとバス」が初めて取り組んだ個展であり、表現メディアも写真に限られた展覧会でした。約300点の写真を鑑賞するにあたり、短い時間でコンパクトにできる二つのワークショップ〈写真の隠された半分を想像する〉〈写真に登場する人物のセリフを考える〉を企画し、ツアーの途中にアクセントとして作用することを志向しました(fig.3)。

2011年に発生した東日本大震災では水戸市も少なからぬ被害を負い、ギャラリーも閉鎖を余儀なくされました。『CAFE in Mito 2011—かかわりの色いろ』(2011年)は、被災地の美術館の中ではいち早く開催された展覧会です。ツアーではそれぞれの体験に寄り添う対話を目指しました。フキダシボードを用いたワークショップ〈アート作品と語り合う〉では、人とのつながりや、明るく未来を志向する表現が多く見られたのが印象的でした(fig.4)。

『水戸岡鋭治の鉄道デザイン展 駅弁から新幹線まで』(2012年)は、水戸岡が手がけた公共交通のデザインを紹介した展覧会。〈デザインってなんだろう?〉と問いかけながら、アイデアスケッチ、ポスター、車両模型、実際の車両内などが展示されたギャラリーをめぐり、最後にフキダシボードに自分の考えを書き込むワークショップを行いました(fig.5)。

2013年から2017年までは、ギャラリーツアーでの対話をワークショップへといかにつなぐかに注力した期間といえます。



fig.3 〈写真の隠された半分を想像する〉ワークショップの様子

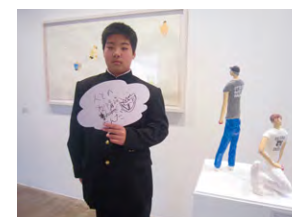


fig.4 「人との友情はいいもんだ」



fig.5 〈デザインってなんだろう?〉「ステキな旅 心のぜいたく 最高のごほうび」
「1人1人に合ったやさしいアイデア」「人のことを考えた使いやすさ」「デザインは“カラフル”でおもしろい!」



fig.6 「光を支える影 自分を導いてくれる色」

まばゆい色彩の絵画が特徴の『曾谷朝絵展 宙色』(2013年)では、「きれい・すごい・心地がよい」といった初期の印象に隠れがちな、興味関心を探ることに注力しました。ギャラリーツアーの対話では形容詞と名詞を組み合わせて印象を表現する〈〇〇な□□の形から考える〉を行いました〔fig.6〕。自分の感覚をうまく表現できない例が多く見受けられ、表現をどのようにサポートするのが課題となりました。

作家の世界観を引用するワークショップも企画しています。『鈴木康広展 近所の地球』(2014年)では、日常の見慣れた事象に新鮮な切り口を与える作品を堪能したあとで、ワークショップ〈〇〇の人〉を実施。展示作品《大きな空気の人》《羽根の人》《気球の人》のタイトルを引用し、身近なものと組み合わせて〈〇〇の人〉を構想しました〔fig.7-8〕。

9組のアーティストが参加したグループ展『カフェ・イン・水戸 R』(2015年)では、一つの作品に対して異なる見立てや感情が引き起こされることに想を得て、二つの吹き出しが並ぶワークシート〈ダブルフキダシシート〉を作成。最初の印象と、あとから感じたことの二つを吹き出しに書き、「だけど」「だから」「そして」などの接続詞でつなぐワークショップを行いました〔fig.9〕。世界をフィールドに活躍する写真家、石川直樹の個展『石川直樹 この星の光の地図を写す』(2016年)では、ワークショップ〈旅のつづき〉を行いました。ワークシートには会場に展示された地図を縮小して掲載し、次に旅するところ(未知の世界)を想像して、箇条書きやイラストで書き表しました〔fig.10〕。



fig.7 〇〇の人 ワークショップの様子



fig.8 「ごほんの人」



fig.9 「キラキラ!!」そして「こおり?」/「ただのラクガキ」ワークシート。参加者が紙板を持って発表している。



fig.10 旅のつづき ワークシート。地図のイラストと「旅のつづき」という文字が描かれている。

『デイヴィッド・シュリグリー ルーズ・ユア・マインドーようこそダークなせかいへ』(2017年)は、ドローイング、アニメーション、彫刻、インスタレーションなど多様な表現メディアで、シュリグリー独特のダークなユーモアが繰り広げられた展覧会。そのユーモアをどう感じるのかを中心に対話し、〈シュリグリー作品のセリフ〉をフキダシボードに書きました〔fig.11〕。

2018年からはガイドスタッフに時間配分を委ね、子どもたちのペースに寄り添った鑑賞ができるようになりました。

『霧の抵抗 中谷芙二子』(2018年)では、子どもたちのリクエストに応じてギャラリー内と屋外を行き来しながら中谷の霧の彫刻作品を体感し、〈霧は何を語りかけてくる?〉を想像して、ワークシートに書き込みました。実施ポイントを数か所設置し、ワークショップのタイミングをガイドスタッフに託しました〔fig.12〕。

『アートセンターをひらく 第II期』(2019年)は、アートセンターの役割を探る展覧会。アートセンターを「アートが生まれる場」と捉えなおし、ギャラリーをアーティストや来場者の創作と対話のために活用した第I期をもとに、第II期では展覧会を軸に対話とさまざまな活動を育みしました。近年は小学1年生の参加もあるので、ワークショップは幅広い年齢層への対応を意識しています。〈ギャラリー内で見たもの三つ〉を矢継ぎ早にあげ、どうしてそれらが思い浮かんだのか話し合いました。ワークシートは持ち帰って家庭で説明できるほか、チケットカウンターに持参すると割引券となる工夫を施し、再来館の機会をつくりました〔fig.13〕。



fig.11 「頭はあるよ!」

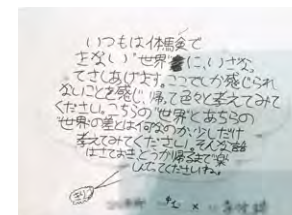


fig.12 霧の抵抗 ワークシート。霧のイラストと「霧は何を語りかけてくる?」という文字が描かれている。



fig.13 岩を転がす男の人 ワークシート。岩のイラストと「岩を転がす男の人」などの文字が描かれている。

参加するには？

「あーとバス」は年に
6日間実施しています。
授業だけではなく、
学校行事や放課後活動など、
団体の希望や都合に合わせて
ご参加ください。



募集チラシ

開催時期	年度によって異なります 実施例 2019年度12月、2018年度11-12月
時間	60 - 90分 滞在時間は団体の希望に合わせてアレンジします
対象	小学生、中学生
参加費	バスを利用する場合 児童、生徒1名につき300円 バスを利用しない場合 児童、生徒1名につき100円 引率の先生は無料、欠席者分は不要、支払いは当日です 送迎バスを利用せず、徒歩や路線バス、団体が手配したバスでもご参加いただけます
募集方法	募集開始後、当館ウェブサイトにて情報を掲載します 水戸市内の小学校、中学校には募集チラシと申込用紙を配布します チラシの送付をご希望の場合は電話でお問い合わせください
募集時期	4-5月頃から募集、6-7月頃締め切り 締め切り後も空きがあれば受け入れ可能ですので、ご相談ください
申込方法	申込用紙に必要事項を記入し、FAXでお申し込みください
申込後	他の団体やバス会社と調整のうえ、日時を決定しご連絡します 申し込み状況によりご希望に添えない場合もありますので、あらかじめご了承ください
来館まで	開催約2週間前に連絡事項をFAXでお送りします 指定した数のグループ分けと、バス会社との集合場所や時間の確認をお願いします

3つの特徴

1 対話を中心にした鑑賞

少人数のグループに分かれて、発見や感想を話し合います。
作品を見て、話して、聞いて、考えることで、自分の価値観に気づいたり、友達とのちがいを楽しんだり、おたがいを認め合うきっかけになります。

2 地域の大学生や社会人がガイド

グループごとにガイドスタッフが同行します。研修を受講した地域の大学生や社会人、当館のATMフェイス（館内係員）など、さまざまな立場や年齢で構成されるスタッフが、子どもたちの主体的な鑑賞をサポートします。

3 送迎バスを手配！

学校や団体所在地と当館を結ぶ送迎バスを運行。児童、生徒の人数に合わせてバスを用意します。

* 2020年3月現在の情報です。内容は変更になる場合があります。詳細はお問い合わせください

Tel.029-227-8120
水戸芸術館現代美術センター
教育プログラム担当

Q&A

部活動で参加できますか？

A. 平日は18:00まで、土曜日の開催もありますので、ぜひご参加ください。

学校以外の団体も参加できますか？

A. 小中学生を受け入れている学童クラブや放放学級、NPO法人なども参加できます。

水戸市外の団体も参加できますか？

A. できます。交通手段は各自手配をお願いします。

申し込み後、団体側で準備することはありますか？

A. バスは当館で手配します。鑑賞中は、子どもたちの発見や感想から対話するので、事前学習は特に必要ありません。お気軽にご参加ください。

持ち物はありますか？

A. 鑑賞中は名札着用をお願いします。ガイドスタッフが子どもたちの名前で話しかけることで、初対面でも打ち解けやすくなるためです。ワークシートや筆記用具は当館で準備します。

「あーとバス」の日程と都合が合わないのですが

A. 展覧会会期中は団体鑑賞を随時受け付けています。自由見学や対話を中心としたグループ鑑賞も可能ですので、見学の3週間前までにお問い合わせください（日程によってはご希望に添えない場合もあります）。この場合、交通手段は各自手配をお願いします。

その他、バリアフリー、特別なケアを必要とする児童、生徒への対応／広場での昼食／タワーの見学／会場下見／展覧会の事前説明（出張授業）などご相談ください。



美術館という「非日常」がもたらすもの

春田友則 水戸市立第一中学校 美術科主任

水戸市立第一中学校の美術部は、「校内ギャラリー『IC Art Museum』の運営」、「地域に開かれた創設ギャラリー『ギャラリーひのたて』の運営」、そして「校外における美術鑑賞」を活動の大きな柱としています。「IC Art Museum」は校内の壁面に展示スペースをつくって美術部員の作品展を開催。「ギャラリーひのたて」は空き教室を改装して本格的なギャラリーをつくり、美術作家の展覧会を開催して地域に広く開放しています。また、休日を利用して近隣の美術館を訪れる活動にも力を入れています。美術部の活動として美術館を訪れる目的は、生徒たちが本物の美術作品と出会うことです。また、一日のほとんどを過ごす学校という「日常」を、場を変えて「非日常」に転換させる目的も挙げられます。「ハレとケ」の概念があるように、学校（日常）と美術館（非日常）の両方の場での活動を通して、生徒の意識が刺激され、様々な美術に触れた時の感受性がより豊かになると考えています。

水戸芸術館では「あーとバス」のリハーサルとして、ガイドスタッフの方々と美術部員が、小グループに分かれて鑑賞する活動に数回参加しました。生徒たちにとっては、幅広い年齢層の大人と美術作品についてじっくり会話をすること自体が新鮮で、「非日常」的な体験です。様々な経験や知識をもった大人と

会話をする刺激の中から、生徒たちは新たな視点に気付いたり、美術作品を鑑賞しながら深く考える楽しさを味わったりできました。

「また参加してみたい」という、生徒の声に込められているように、美術館という場で「あーとバス」のような「非日常」的な鑑賞活動を通してこそ、学校という「日常」だけでは得られない多くの考え方や視点を享受し、意識の新しい次元を開けるのではないのでしょうか。



「春田友則展—表現の軌跡—」ギャラリーひのたてでの鑑賞授業の様子（左が筆者）

ガイドスタッフの 活動

ガイドスタッフとは？

小学生、中学生と一緒に作品鑑賞を楽しみませんか？

美術の知識や経験がなくても大丈夫。

仲間たちと研修を重ね、見る力、聴く力、伝える力を学びあいます。

(2019年度ガイドスタッフ募集チラシより)

ガイドスタッフは、子どもたちの**作品鑑賞のサポート役**。

5回の研修を経て、**子どもたちと鑑賞**します。

子どもたちのペースに合わせ、

対等な立場で関われるような研修をしています。

2019年度は**高校生**から**70代**まで**47人**が参加しました。

参加するには？

募集開始後、当館ウェブサイトに情報を掲載。
館内でもチラシを配布しています。
翌年度の継続参加も可能です。

募集時期 研修の約3か月前から

申込方法 ウェブサイトの「申込フォーム」よりお申し込みください

研修、本番の開催時期と回数 年度によって異なります

実施例 | 2019年度 研修：11-12月に5日間、本番：12月に6日間

参加条件 *変更になる場合があります

1. 16歳以上の方
2. 美術、教育、コミュニケーションに関心がある方
3. 説明会と研修に参加できる方
4. あーとパス本番に2回以上参加できる方
5. メールで連絡できる方



募集チラシ

参加したきっかけ

友人に誘われて

鑑賞の仕方を学びたい

現代美術を知りたい

芸術の分野に一歩足を踏み入れるため

経験を自分の活動に落とし込みたい

育休中で時間があるため、新たな場所を発掘したい

自分の視野を広げたい

教育に興味があって

コミュニケーションをするため

先生じゃない私で子どもたちと楽しみたい

* 動機はさまざま *

大切にしている3つのこと

1 多様な人たちで構成

障害の有無は問いません。子ども同伴OK！

16歳以上であればどなたでも参加できます。

一般公募のスタッフに加え、ATMフェイス（館内案内係）、CACギャラリートーカー（週末のギャラリートークを担うボランティア）も参加。さまざまな立場や年齢の人がいるので、得意なことをシェアし、苦手なことは補完しながら学びあえる環境です。

本番では原則二人で1グループを担当。子どもたちへの接し方も現場で吸収できます。

2 美術の知識や経験は問いません

知識や経験よりも、コミュニケーションを楽しむ姿勢を大切にしています。一方的に情報を伝えるのではなく、子どもたちの発見や感想をきっかけに对话をしているからです。研修では、子どもたちと鑑賞する作品をガイドスタッフ同士で鑑賞してシミュレーションします。初めての方も安心してご参加ください。

3 教えない研修

研修にはマニュアルがありません。ガイドスタッフ同士が等しい立場で、主体的に学べる場をつくっています。また、当館の展示は企画展のみのため、作品や動線、気をつける箇所が毎回異なります。毎年度、集まった人たちと課題や注意点をディスカッションしながら、経験値をともに積み上げていきます。

活動レポート

研修 | 2019.11/4,10,17,24,12/1



アイスブレイク

毎回行うアイスブレイク、この日は「並び競争」。コミュニケーションをとりながら、名前順や生年月日順に並ぶ。



鑑賞

グループごとにスライドで作品鑑賞。「なにが見える?」「絵の中ではなにが起きている?」を手掛かりに、見つけたことや思ったことを聞き、話す。

発表

挙がった話題を発表。ユニークな考えに笑いが起こることも。



学芸員のレクチャー
展覧会の方針や出品作家についての説明。



ワークショップ

出品作家の末永史尚さんの組み換え可能な絵画《タングラム・ペインティング》を体験するワークショップ。出品作品についての質疑応答も。



リハーサル

本番のシミュレーション。
協力 | 水戸市立第一中学校美術部



ガイドスタッフメモ

研修ごとに書くガイドスタッフのメモが次回研修のヒントに。



本番 | 12/4-7, 12/13-14



本番前ミーティング

本番の30分前に集合。全体連絡、各グループのペア同士で打ち合わせ。



ギャラリーツアー



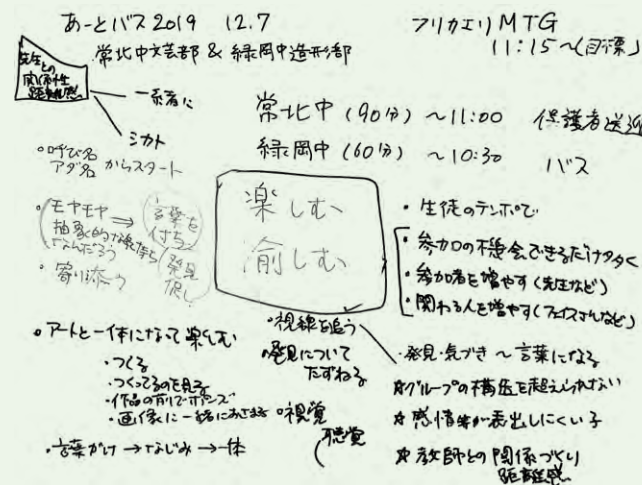
本番後ミーティング

グループごとに実践やエピソードを報告。課題や気になった点はアイデアを出し合う。



マップ

子どもたちの反応や作品保全で気をつけたい場所をマッピングし、共有。



ホワイトボード

2019年度は「許容」「フラットな交流」「Enjoy」など、各日にテーマを設ける試みを行った。



プログラム監修 | 林剛人丸
(美術作家/筑波大学技術専門職員)

「飛ぶこと/飛んでいる」を題材とした作品発表やワークショップなどの活動を展開。2019年11月には、茨城朝鮮学校主催の第3回茨城県日朝友好促進特別授業会にて初級部1-3年生を対象にワークショップ〈空を飛ばす紙ヒコキ〉を行った。(同校は2017年度より「あーとバス」に参加。)

2019年度の研修

Date	テーマ	スタディ 1		スタディ 2	スタディ 3
11/4 10:30 -12:00	説明会	・水戸芸術館現代美術センターの活動 ・「あーとバス」の概要 ・ガイドスタッフ経験者の話 ・ガイドスタッフへ質問 参加のきっかけ			
13:30 -17:00	研修 1	・作品を観察して言葉にする 観察する→印象→発見→想像→言葉にする→共有する ・アイスブレイク 並び競争 ・スライドで作品を鑑賞・対話 ①《ルーサー・バーバンク》 フリーダ・カーロ ②《自分の部屋から宇宙へ飛び去った男》 イリヤ・カバコフ		・ギャラリーで作品を鑑賞・対話 ③ 毛利悠子	・「今の私と美術館」について話す
11/10 13:30 -17:00	研修 2	・アイスブレイク 「実は〇〇です」自己紹介、共感と受容を示す言葉を挙げる ・ギャラリーで作品を鑑賞・対話 ① 潘逸舟 ② 呉夏枝		・ギャラリーツアーケーススタディ 「どんな発話が有効か」を考える ③ 毛利悠子 (2回目)	・ディスカッション 1. 質問が違うとなにが変わる？ 2. どんな情報が必要？ 3. 児童生徒目線で気づいたこと
11/17 13:30 -17:00	研修 3	・提案する 1. 作品になってみる 2. 視点を変えて見る 3. ストーリーを考える	・ギャラリーツアーアトリアル 「発話から展開まで」を考える ① 潘逸舟 or 呉夏枝 ② 呉夏枝 or 潘逸舟	・本番の進行、作品保護の説明 ・ギャラリーツアーアトリアル 「情報の共有から提案する」を考える ③ ハロルド・オフエイ ④ エマニュエル・レネ	・ワークショップアトリアル 感じたこと、気づいたことを共有 ・作品保護の説明
11/24 13:30 -17:00	研修 4	・作家の気持ちで考える ・作品同士のつながりを考える	・担当学芸員に聞いてみる 竹久侑 ・出品作家に聞いてみる 末永史尚	・末永史尚《タングラム・ペインティング》 ワークショップ	・ギャラリーで作品を鑑賞・対話 ① 砂連尾理 ② 末永史尚
12/1 10:00 -16:00	研修 5	・リハーサル	・リハーサル前グループミーティング ・リハーサル ・リハーサル後グループミーティング ・全体シェア	・全体ミーティング	・Q & A

interview

インタビュー

ガイドスタッフの川上佐千代さんと靳菊代さんに、
「あーとバス」や水戸芸術館のことを聞きました。

ガイドスタッフ3年目。
同じくスタッフを務める柳橋さんの仲介で、会社員のかたわら子ども向け絵画教室の講師も。



じん きくよ
靳 菊代さん

ガイドスタッフ4年目。
長女が1歳の時に参加した、当館の「赤ちゃんと一緒に美術館散歩」を機に、今度は主体的に活動したいと参加。長男が通う学校が2019年度に来館。親子で一緒に「あーとバス」の体験をした。



かわかみ さちよ
川上 佐千代さん

—参加したきっかけ

靳 (以下J) きっかけはTwitterだったかな…を見て参加しました。

川上 (以下K) へー！靳さんはもともと美術系…絵を描いていますよね？

J 久しぶりに美術の勉強をしたいと思っ
たし、友だちも欲しいなと思って応募
したんですけど¹、川上さんはどうで
すか？

K 私は子どもを育てていて、教育にア
ートをうまく取り入れたいなっていう親
の下心もあって。私は靳さんとちがっ
て、美術や芸術に関してすごく苦手
意識があって、どうやって子どもと作
品を見たらいいか分からなかった。
研修でやり方を教えてほしかったし、
一緒に経験するお友だちがほしけれ
たというのもありましたね。

—参加してよかったこと

J お友だちができて、一緒に休みの日
に展覧会を見に来たりランチしたり²。
そういうこともよかった。

K ほんとほんと！みんなで一緒に美術
館に来て、いろんな意見を話すって
いうのが大人になるとなかなかでき
なかったから、すごく新鮮ですね。
さまざまなバックグラウンドのある
大人と一つのものを見てたくさん話
せるし。自分の子どもと一緒に見ると、
普段の生活ではなかなか出てこ
ないような意見を聞けて、それだけ
で脳みそリフレッシュしちゃうみたい
な(笑)³。

J そうですね(笑)。

—水戸芸術館との距離感

J 水戸芸術館って(心理的な)距離があ
まり近くなかったから、ちょっと近く
なった気が。

K しますね！小さい子どもがいたら、
美術館って足を運びにくいなあって、
スタッフとして入る前は正直思ってい
たんです。でも、水戸芸術館の好きな
ところは多様性を認めてくれること。
子どもを連れてきてもいいし、連れて
こなくてもいいし⁴、喋れてもいいし
喋れなくてもいい⁵。いろんな人の居
場所をつくろう⁶っていう、そこだけ
一貫しているところがすごく潔いなと
思っ

J そうですね(笑)。

K そこがすごく心地よくって嬉しい。
一緒にやれて嬉しい(笑)。

J よかったね。

K そこがよかったとこかな。

J わかる！

- 1 子どもたちのための鑑賞プログラムでもあり、市民の学びの場としても機能している。
- 2 解散後も、当館の団体鑑賞をサポートしたり、自主的に展覧会を鑑賞したり、有志で活動を継続している人たちがいる。
- 3 「アンチエイジングみたい」とも表現。「あーとバス」の経験を積んだことで、子どもやパートナー、ママ友との接し方も変わってきたという。相手を頭ごなしに否定したり、思い込みで判断したりしなくなったと本人談。

4 ガイドスタッフの佐々木さんが当時中学1年生のお子さん(空さん)と一緒に研修に参加。中学生から意見を聞いたり本番のシミュレーションができた経験から、スタッフの子ども同伴をOKにしている。2019年度はギャラリー内の特設カフェ「ひらくカフェ」で研修と本番を実施。カフェ内のキッズスペースでスタッフのお子さんが遊んでいる場面も。



佐々木空さん
(中学3年生、2017-
2018年度参加)

5 ガイドスタッフが話すべき言葉や動き方などのマニュアルはない。いろいろな子どもたちが来るので、作品を見て分からなくても、受け入れられなくても、話せなくてもよいと伝えている。「まずは孤立しないように子どもたちを見守る」「子どもの存在を尊重したい」という言葉が、12年間の積み重ねを経てスタッフから出てくるようになった。

6 2019年度は、0歳の赤ちゃんや小学生と一緒に研修に来るスタッフ、視覚障害のあるスタッフも参加。本番では予告なしにグループに入った。視覚障害者のスタッフが入ったグループでは、子どもたちがアテンド役を務めたが、作品に夢中になるあまりアテンドを忘れる微笑ましい場面も。



久保佳奈さん、
結理乃さん(0歳)



武藤諒さん
(小学4年生、2018-
2019年度参加)



白鳥建二さん
(視覚障害者)

2019年度ガイドスタッフ

(敬称略、50音順)

秋山佳代	阿部清治	阿部萌香	雨谷智代
石崎敏子	海野輝雄	大作朋香	大縄祐子
岡田豊	梶間拓海	川上佐千代	川島史也
久保佳奈	小岩美帆	小林真子	佐々木博子
佐竹勉	佐藤さやか	佐藤誠二	白鳥建二
靳菊代	鈴木桂子	須藤頼宣	関沙也花
竹内真優花	楯佳織	田中夕子	塚田真衣
寺門由江	永島有紀子	仲村智里	西山紗友理
蓮見由紀子	初沢春美	服部泰	福井彩香
藤川明史	細谷千亜子	松崎理恵	宮田幸江
武藤忍	武藤諒	矢ヶ部優希	柳田肖美
柳橋剛	山崎愛那夢	和久井瑛理	

石井一十三 入江彩美 小泉英理 後藤桜子 鳥居加織 (当センタースタッフ)



バスは走りつづける

佐藤麻衣子 水戸芸術館現代美術センター 教育プログラムコーディネーター

当センターは1990年の開館以来、アーティストのワークショップや鑑賞プログラムを行い、市民が集い、他者と学び合える機会を提供してきた。「あーとバス」が他のプログラムと大きく異なる点は、参加者に美術や図工好きではない子どもたちが含まれていること。アーティストのワークショップや鑑賞プログラムは、本人や家族が美術好きで、学校の授業に加えて美術館のプログラムに参加したい（させたい）子どもたちが来館する。一方「あーとバス」では、クラスや学年単位で来館するため、本人や家庭の好みや考え方、家庭状況の異なる子どもたちが一緒に鑑賞する。そのため、鑑賞中の子どもたちの反応はさまざま。例えば、「美術鑑賞よりも体を動かすことが好き」と話し、美術鑑賞にまったく興味を示さない子。「なにしにきたか分からない」と言いながらも、目の前の作品に興味を示して言葉があふれ出す子。デートのように盛り上がり、ガイドスタッフとはまったく話さない二人組など。

ガイドスタッフは予期せぬ出会いに戸惑いながら、子どもたちの存在を尊重し、受け入れながら一緒に鑑賞してきた。それができるのは、子どもたちと鑑賞する前に、研修で同じ体験をするからだ。数人で一緒に作品を鑑賞し、思ったことや感じたことを話す。他の人は話を聞きながら、意見の相違を受け入れたり、共感したりしながら話していく。一人での美術鑑賞に慣れている人や、会社や家庭と同じ役割から切り替えにくい人は、最初は率直に意見を伝えるのが難しい。気軽に話せる雰囲気やガイドスタッフ同士の関係性ができると、対話を取り入れた鑑賞の面白さを獲得していく。それに加え、多様な子どもたちが来館する「あーとバス」には、ガイドスタッフの多様性が重要だ。2019年度は、年代は10代から70代まで、職業は学生や主婦、社会人、定年退職者。ほかにも視覚障害者や赤ちゃん連れのお母さんがガイドスタッフを務めた。同じような年齢、立場の人同士では意見は似通ってしまうが、さまざまな人との関わり

で気づく差異は、対話が広がりコミュニケーションの活性化につながる。このような体験をしたガイドスタッフは、子どもたちにも対話を取り入れた鑑賞や自分とはちがう考え方を肯定する楽しさを伝えられる。ガイドスタッフは「思ったことは話していいんだよ」「授業やテストでないから点数はつけないからね」「友達と意見がちがってもいいんだよ」と経験から伝えられる。すると、子どもたちが安心して話せるようになる。子どもたちは自分自身の価値観に気づき、友達とのちがいを面白いと思ったり、おたがいを認め合ったりできるようになる。

ある時、来館した中学生たちに「大人だって意見は変わるんだよ」と言ったら驚かれた。「よく思い出してみて。先生やうちの人が、昨日言っていたことと今日言ったこと、ちがっているなって思ったことはない？」「あー、あるある！ 大人って絶対に正しいことを言っていて、意見が変わらないと思ってた！」

私たちは日々変化する社会のなかで、価値観を揺さぶられながら、時には意見を変えながら生きている。子どもたちはいずれ社会に出る。関係や役割が固定されがちな学校や家庭以外で、いろいろな人に出会い、立場に捉われず自由に話し、聞き、考えることで、他者や自分のなかにある多様性を楽しんでもらう。「あーとバス」は、未来の市民へ大人ができることのひとつなのだ。

社会へ出た子どもたちと、作品を前に一緒に話せる日がくるかもしれない（これまでに、「あーとバス」に参加した小学生が、大学生になってガイドスタッフとして戻ってくる嬉しい例もあった）。「あーとバス」以外でも、地域で一緒に活動できる日がくるかもしれない。来たるべき時のために、一人ひとりを認め合える仲間たちが地域に増えることを願って。これからも「あーとバス」を走らせます。まずは美術館で会いましょう。

「美しい」のわからなさを、語るために。

石田喜美 横浜国立大学教育学部 准教授
「あーとパス」2008ガイドスタッフ／「あーとパス」2011-2014オブザーバー

以前、ガイドスタッフのための参考図書として、森村泰昌『「美しい」ってなんだろう？ 美術のすすめ』が紹介されていた。本書の「あとがき」には、次のような文章がある。

最近、「美しい」という言葉を日本の首相もお使いになりはじめましたね。しかし私がなんどもくりかえしお話してきたことは、なにが「美」かなんてだれにも決められないということでした。「これを美と思いなさい」と、「美」をおとなから押しつけられるのは、やっぱりおかしいし、ましてや「これが国民として持つように教育されるべき美意識だ」とまंनीち法律化されるとすれば、なおさらおかしいです。

なぜなら、「美」はひとそれぞれだからです。それぞれにそれぞれの「美しい」がある。このそれぞれの「美しい」を語りあい、なぜそれが「美しい」のか、意見交換することで、人間や自然や宇宙を理解する糸口も見えてくるはず。（森村，2011，pp.283-284）

その当時から、美術をめぐる状況も教育や社会をめぐる状況も一変した。しかし、「あーとパス」においては、一貫して、この「美しい」への姿勢が大切に守られ続けてきたように思う。

印象的なエピソードをひとつ紹介したい。2011年のガイドスタッフ研修での出来事だ。その年は『CAFE in Mito 2011 ― かかわりの色いろ』展で「あーとパス」が実施されることになった。研修では、自分たちがガイドを務める展覧会を鑑賞する。その初回の鑑賞ツアーで、ある大学生がハスラー・アキラの作品解説を聞きながら、しゃがみこんでしまった。あとから事情を聴いてみると、ハスラー・アキラがゲイの美術作家であり、展示作品も彼のセクシュアル・マイノリティとしての視点が反映されたものであると聞き、貧血のような状態になったのだという。この年には参加

していた児童の中にも、奈良美智のインスタレーション作品を見て、その「乱雑」さに怒りを顕わにしていた子どももいた。

「美しい」ことは、すなわち「快い」ことでも、「心地よい」ことでもない。「美しい」とされるものは、ときに立ち上がれなくなるほどのショックや悲しみ、抑えきれない怒りを与える。「美しい」に向き合うことは、その一つひとつの感情の動き、その感じ方の異なりに向き合いながら、言葉を尽くして語り合い、対話し続けることによって、その場にいる人々みんなが「美しい」を語るための言葉を創造していく行為だ。新たな「美しい」を創造したとき、そこには新たな感情が生み出される。これまで「敵」だと思っていた何かは、実はそうでもなかったかもしれない——そんな感情がふわりと浮かんでくるのだ。

現在、学校においては、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の名のもと、図工・美術や国語の学習活動として、対話による鑑賞が多く行われるようになってきている。美術館の所蔵作品カードを教材に使う実践も散見されるようになってきた。作品と向き合い、そこから言葉を生み出そうとすること——それは、それだけで十分に価値がある。それでも「あーとパス」が、水戸芸術館現代美術センターのプログラムとして継続され続けるのは、それにしかできないことがあるからだ。それはおそらく、現代アート作品から見出した「美しい」を、いろいろな年齢の人々とともに語り合えることにあるだろう。現代アート作品は、今の時代を生きる作家たちが、複雑な社会や文化と対峙しながら、そこに「美しい」を見出した成果でもある。では、そこにある「美しい」とは何なのか——それを語りあうことで、今という時代を生き抜く知としての「美」をともに創造することが、「あーとパス」の向かおうとする目的地なのかもしれない。

【参考文献】 森村泰昌『「美しい」ってなんだろう？ 美術のすすめ』、イースト・プレス、2011年

12年の活動スケッチ

林剛人丸 プログラム監修
美術作家／筑波大学技術専門職員

水戸芸術館現代美術センター（以下、芸術館）の元芸術監督の故・浅井俊裕さんから、水戸市内の小中学校向け鑑賞プログラムの監修を引き受けてくれないか、と持ちかけられたのは2008年の初夏のことだ。芸術館を訪ね、教育プログラム担当の森山さんを交えて3人で話をした。浅井さんが温めていた「送迎バスを準備する」「少人数のグループで鑑賞する」という構想のもと、グループのリーダー役（ガイドスタッフ）を筑波大学の学生が担ったらどうだろう、学生に相談してみようということになった。

大学に戻って、顔見知りの学生たちに、義務教育過程にある小中学生に現代美術を紹介したいのだと説明すると、とても素敵なことですねと数名が応じてくれた。嬉しく思いながら、まだ人数が足りないなあとチラシを配っていたら、芸術支援コースの直江俊雄先生が、学外演習の授業枠で学生と参加したいと申し出てくれた。芸術と教育、芸術と社会の関わりを学ぶ学生たちの力を貸してもらえるのはありがたかった。専門の研究者からの支援も心強く、「できるだけ早いうちに名前をつけるのがいいよ」と助言を受け、はとバスから引用して「あーとバス」とネーミングした。

芸術館ならではの縁もあった。芸術館では、市民の視点で来館者と作品について語り合うギャラリートークをするボランティア（CACギャラリートーカー）が1992年から組織されている。森山さんの声かけにより、このメンバーからも趣旨に賛同して参加してくれる方々がいた。また、普段はギャラリーの受付や監視業務にあたっている職員の方々（ATMフェイス）の協力も得ることができた。彼女たちは現場の最前線にいるプロフェッショナルでもあり、展覧会の会期中、最も長く作品の傍らに寄り添っている存在でもある。

2年目以降は筑波大学以外の学生や、一般の人たちにも枠を広げ、さらに多様な人たちが参加してくれるようになった。

1998年から99年にかけて芸術館で開催された『なぜ、これがアート

なの？』展（水戸芸術館現代美術センター、川村記念美術館、豊田市美術館の共同企画）は、対話型鑑賞が国内に普及する契機の一つであったとされている。美術史の流れではなく、実際に作品を目にしたときに感じられる色や形によって展示室が分けられており、自分なりのアートの楽しみ方を見つけてもらう展覧会だった。会期中は対話型のギャラリートークが数多く行われた。このような経緯から、芸術館の小中学生に向けた鑑賞プログラムが、対話を取り入れたことは自然な流れだったと思う。

「あーとバス」では、作品を見て心に起こったことを言葉にして話してみよう、言葉が交わったら何が起こるか見てみようというのを基本コンセプトとしている。美術作品をどう感じるか、どう捉えるかには正解も不正解もない。感じたことがそれぞれ違うのは、それぞれの感性が違うからである。個々人の感性を、「あーとバス」は何より大切にしたいと考えている。

ある年のギャラリートツアーでは、畳3枚ほどの画面いっぱいに描かれた樹の絵を見て、中学生が「猫がいる」と呟いた。しかし見上げる構図で描かれている画面に猫は見当たらない。聞けば、画面の外まで想像して、木の根元に猫がいるような気がしたのだという。彼女の言葉をきっかけに画面の外側の世界を想像して、このグループでは生徒もガイドスタッフも



日高理恵子《樹を見上げてVI》1992
撮影 | 加藤健 所管 | 水戸芸術館

隔たりなく大いに盛り上がった。

誰かと一緒に作品を鑑賞すると、感じたことや思ったことの理由を見つけられるのは本人だけではないと気づく。前述の中学生が想像した猫についても、他の人が一緒に考えることで、それもあるかもしれないとか、違うけど共感できるとか、新しい見方が生まれた。この時、作品の正解を超えた“意味”が生成されたと言っていいたいだろう。

「あーとバス」の現場についても紹介したい。プログラム全体ではマニュアルやルールはつくっていない。反対に、決まりごとみたいなものを12年の間少しずつ取り除いている。毎年まっさらな状態から始めて、集まった人たちと、得意なこと、苦手なこと、経験値をシェアしながら、現場をつくりあげていく。

ガイドスタッフの研修では、情報や手法を教授する代わりに、本番と同じようにグループでの作品鑑賞を繰り返し行っている。スタッフの中には、美術を専門に研究する大学院生もいたし、美術館に一度も行ったことがない会社員もいた。背景が異なる人たちが、作品を見て感じ考えたことを対等に話し、他の人が話しているときには肯定的に対等に聞く。やってみると、話を受け止めてくれることが話しやすさにつながると実感し、他者の感覚に共感や興味を覚えたり、違いを感じたりする。それによって、他の人の感じ方を受け止め、自分の意見や見方を更新できるようになる。

こういった研修での経験を活かして、ガイドスタッフは子どもたちの鑑賞活動をリードしていく。話す相手が大人から子どもに変わっても、「自分の感じたことを話す」「受け止めながら聞く」「対等な立場で対話する」という柱は変わらない。開始直前に行われるミーティングは、スタッフ相互の信頼感がわかりやすく現れる。スタッフが集合し、全体での事務連絡を済ませたら、残った10分でグループを担当する相方と持っている

情報を交換したり、役割分担を決めたりする。時間は短い熱量は高い。僕はこの時間がとても気に入っている。

始まった当初から改善の余地を探ってきたのは、子どもたちとの鑑賞時の時間配分についてだ。鑑賞活動の理想からすれば、鑑賞の深度や対話の盛り上がりには照らして、展示作品ごとに鑑賞時間が異なったり、気になる展示があればもう一度戻ったりしたいと思う。ところが、ギャラリーには空間的制限があり、混乱を避けるためには平均的にグループを分散させざるを得ない。そのため最初の年から10年間はギャラリーを細かくエリア分けし、5～6分毎に1エリアずつグループが進行する、機械的なスケジュールを採用していた。近年は、各グループに、体験型の作品のところだけ時間を割り振り、あとは「どの時点でどの地点にいてもよい」としている。自由にすることで困難が生じると思い込んでいたが、ガイドスタッフに託してみると大きな混乱もなく展開している。スタッフが状況に合わせて活動する様子を見てみると、マニュアルやルールをつくらずに進めてきた12年の長さを改めて見せつけられたような気になった。

「あーとバス」が始まった年に、チラシやらスタッフの名札やらに使うためのバスのイラストを描いた（巻末参照）。なるだけシンプルにと思いながら描いたのだが、出来上がったバスには、出入りのための昇降口にあたるものがない。どうしたものかと考えながら眺めて、ふと、『となりのトトロ』に出てくる「ネコバス」には昇降口がなかったなと思い当たった。ポディの脇に乗り口が開いて、中へと迎え入れてくれる。そういうのもいいかもしれないと考えて、そのままにした。温かみがあって、手触りのあるバス。行きたいけど行けるとも思えなかった場所へ連れて行ってくれるバス。誰にでも見えるわけではないバス。今になってみても、それは「あーとバス」のイメージにわりと近いと思うのだが、どうだろう？

水戸芸術館現代美術センター 教育プログラム「あーとバス」

主催	公益財団法人水戸市芸術振興財団
協力	タビッツアーズ株式会社 [2015-2019年度]、サントリーホールディングス株式会社 [2019年度]、 アサヒグループホールディングス株式会社 [2017-2018年度]
スタッフ	監修 林剛人丸 (筑波大学)
企画・運営	佐藤麻衣子 [2014年度-]、中野詩 [2010-2013年度]、森山純子 [2008-2009年度] (水戸芸術館現代美術センター)
アシスタント	本間未来 [2008年度-]



あーとバス記録集 2008-2019

小中学生との鑑賞プログラム

水戸芸術館現代美術センター資料 第112号

編集	佐藤麻衣子、林剛人丸、入江彩美、本間未来、森山純子
デザイン	黒澤文子 (vangraphics)
写真	大谷健二、仲田絵美、根本譲、林剛人丸、矢野津々美、山崎宏之
イラスト	佐藤純也、林剛人丸、森山純子
協力	田村美穂子 (城里町立常北中学校)
印刷	株式会社光和印刷

発行 水戸芸術館現代美術センター ©2020
〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
TEL.029-227-8120

発行日 2020年3月31日

禁無断転載
ISBN 978-4-86525-012-1



スタンプ ^{おしゃべり} ^{おしゃべり} おしゃべり

☆ ☆ ☆
いろんなものがうごいてる。
へんだった。

ヘッドホン
いろんな音がきけた。



ヘッドホン

スタンプ



これびがたのしだった

これびがすきだか

へとしん(ヘッドホン) たのし
かった。 (すき)

しろくろのつみき
どがすのびがたのしたった。



くらかったへや

白い糸につながってここに重くスポンやラバ

黄色のがべ ^やへ ^やのミニもけい

カフェのへや

のがけら カフェの いろいろな本
男ががべを運ぶ映もう 大オルガン ランタン



カフェのソファが くらいへや ^やのミニもけい

スクリーン

スタンプ ^{糸を上から見た時} ^{きいろ}に見えた。



金のうはがきれいだった。

へやの ミニチュア。石を1人ではこんでいた。

ヘッドホンできくバイ音。 ☆



じゅうで重くもの



